

# 化学教育 徒然草



## 失敗のすすめ

OISHI Tohru

大石 徹

九州大学大学院理学研究院 教授  
平成 29 年度日本化学会九州支部 副支部長



巻頭言

「失敗はしたくない」というのは、人情の常である。特に受験生にとっては人一倍であろう。大学入試では、同じ問題を同じ時間で解き、より多くの正解を答えられたものが優秀であると評価される。正解は最初から決まっておき、ひとつの物差しで単純に比較できるので、評価方法としては平等性が高いといえる。試験に合格することが目的であるため、「こうやったら問題が解けますよ。これが一番の近道ですよ。」と教えるのが「失敗しない」ためには効率的である。

一方で、大学を卒業して企業などに就職した際、研究開発者として要求されることは何であろう？ これまでにない製品やコンテンツを開発し、販売して利益を上げることである。すなわち、答えのないものに対して答えを見つけ出していくことである。さらに、1を100にするのではなく、0から1を生み出すことの方がより優れており、独創性が必要とされる。他人と同じ答えを思いついても評価の対象にならず、誰も考えなかった答えを思いついた方がより高く評価されるため、入試とはまったく異なる価値観になる。また、利益や損失に直結するため、「失敗は許されない」という大きなプレッシャーも押し掛かる。

そこで重要なのが大学の役割であり、このギャップを埋めることが課題である。大学で学ぶべき最も重要なことは、「失敗する」と「挫折を味わう」ことである。大学の研究室では、これまで誰もやったことがないことに卒論や修論研究として挑戦するため、当然のことながら「失敗」する。「こうすればうまく行きますよ。」と、単純に教えられるものではない。また、時間がかかっても人とは違う答えを導き出すのが最も重要なことである。より多くの失敗を経験した人間の方が、より多くの成功を達成できる可能性が高く、すべての偉業は多大な失敗の上に成り立っていると言っても過言ではない。「失敗する」ことを見守る懐の深さと寛容の精神が必要である。これからは、「高校（基本的で重要な考え方を学ぶ）」—「大学（失敗を恐れずに挑戦する）」—「企業（これまでにない新しいものを開発する）」といった、真の意味での連携が重要ではないだろうか？

[連絡先]

819-0395 福岡県福岡市西区元岡 744 (勤務先)